

超越者：スフルトゥア・レヴィアタン

界越者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なんて事は無い日常生活を送っていた1人の男。

その男が神に選定されハイスクールD×Dの世界に転生させられた。

シトリー家の長男として、2人の妹や愛猫や友人達と過ごしていたら気付いた時には超越者で魔王レヴィアタンだった。 ← え？いや… まあ…うん。させられた。

最高の頭脳と精神、そして力を得たスフルトウアと名付けられた男は…絶賛恋人募集中の身だ。 ← アプローチは掛けられますが。

最近妹が激しすぎてドキドキするお兄ちゃんです。 ← 主にセラフォル…いろんな意味で。

ここは空白になっている←

目次

プロローグ	1
雹斧の彗卿	5
二天龍との遭遇	16

プロローグ

何が起きて今こうしているのか…それは今の俺には分からなかった。

「記憶」としては周りにいる子供達に何かを教えている俺…。

そして愛しい人がそこにはいて、俺は何かを言われ苦笑いをして愛しい人は笑みを浮かべ俺の唇に自分の唇を重ねてきた…そこからの記憶は無い。

それが悪い事か良い事かどっちだったかと言われれば…俺はあれ以上の幸せを生きてきた中で味わったことが無かったということに覚えている。

「それはよかった。オマエが不幸のまま死んでいてはこれからの事に支障が出る。」

っ?!頭の芯に響き渡る声…年老いた男の声だ。だがその言葉はまるで俺を虫…いや、ただそこにあるだけの石ころに喋りかけているかのようなそんな気持ち悪さがあった。

「気持ち悪い?面白い事をいうな…。だがまあいい。俺はオマエを石ころ…いや、道端に生えている雑草並みには気を使っているつもりなんだがな。さて、そんな雑草の君にいい事を教えてあげよう…君は死んだ。それはもう何の救いも無く、ただの肉塊となって死んだ。一瞬で死ねたのは君の幸運だ。本来なら君の隣で驚愕に目を見開いていた彼女が死ぬはずだった運命を君が死ぬ事で変えたんだ。おめでとう、君は神にしか弄れない運命を自らの手で弄れた。」

何を言っているのか意味が分からない。ただそこにある台本を読んでいるかのように、つまらなさそうな声色でパチパチと手を叩く音が聞こえてきた。

「自己紹介をしようか…私は神だ。…おつと勘違いをしないで欲しいのは、君の世界の神では無いよ?この世界…いや、この「小説のサイト」には神というのは沢山いるんだ。それはもう幾万の神がね。」

ますます意味が分からない。小説のサイト?何の話だ?

「それは君が気にする事じゃ無いさ。だって君はこちらを鑑賞できる

いからね…違う違う。君はこちらに干渉できないからね。」

……で、神様が何か用なのか？

「ふふふ、それでいいのさ。安心するといい。僕が干渉するのはこの空間だけだ。所謂「プロローグ」という場所だけでいい。そこから先は僕は鑑賞側さ。さて…グダグダと僕が喋っているだけのプロローグなんて、鑑賞側からしたら早く本編をやれよと言われてしまう要因だ。そこでだ…君には神のいない世界へ行く一方通行のチケットをあげよう。ああ、鑑賞する神は幾万といるけどね。」

理解が追いつかない…なんて事は無い。把握はできたさ。つまりはあなたの自己満足…という事だろうか？

「分かっているじゃないか。そう、これは僕の自己満足。だから君は思うようにその世界で生きていくといい。安心するといい…僕も薄情じゃないからね。君が望む物、モノ、者、ありとあらゆる力を幾つか授けてあげよう。そうだね…3つだ。君がその世界で生きていくのに必要な力を授ける。何がいい？」

……話を整理する時間をくれないか？

「ふむ…まあ字数稼ぎにはいいかな。うん、そうだね…じゃあ君のわかる範囲で、言葉を並べて今の状態を整理するといい。」

……いちいち頭にくる神様だな。だけど…やらないと先には進めない気がする。

まずはそうだ…俺は死んでいる。

次に…死ぬ前の記憶は全ては覚えていない。

それは俺の事…自分の事が分からないに直結する。

名前と年齢は勿論、自分がどういう人間だったかが薄っすらとしか分からない。性格は…結構勇気のある、人を愛する事ができるやつだった。

どういう風に死んだかも覚えていないからな…まあ死ぬ前の人格としては今、俺がこうして考えてる内容から推測できる。

次だ…ここは赤や青、緑や黄色などの色がごちゃ混ぜになった…まあ気持ち悪い場所だ。

頭に直接聞こえてくる声は神の声…姿形が見えないのがいい例だ。

そしてその神様は俺をどこかの世界で生き返らせてくれる？らしい。

そして生き返らせてやるついでに、何か必要なものはないかと聞いてきている。

俺は3つ：何かを選ばないとここから出ることもできないんだろ
う。

「そのぐらいでいいんじゃないかな？まあその世界に行ったら君が主役になれるから、ここでわざわざセリフを並べても、これから先ここを見る人は初見の神だけになると思うしね。」

相変わらず意味が分からないが……まあぶっちゃければ早く決めて行けって事だろう。

「分かっているなら早くしようか。僕もぶっちゃけると早く続きを書きたいのさ……特に取り柄の無い平凡な教師だった君が運命を弄った事で神の手で選定され、別の世界でどんな生き様を見せてくれるのかって言う……ある物語の中に現れた1人の男の物語をね。」

……わかったよ。だったら3つ：俺の願いを叶えてくれ。

1：愛する人を傷つけない程度の頭脳を！

2：誰にも臆する事の無い程度の屈強な精神を！

3：運命を弄る程度の力を！

「俺にくれええ!!」

「……………君、結構あれだよね…弾幕は好きかい？」

……ああ。大好きだ………最近はやってなかったけどな。

「くくく、いいね……じゃあ……その「程度」の力を頑張って使いこなすんだよ？安心しなよ…赤子の君にはまだ使わせないからさ。」

………赤子？

「うおおおおおおお!?」

目に見える景色がぐるぐると回り出し、そしてカラフルで気持ち悪かった空間が真っ黒になった。

生暖かい感触に意識を手放しそうになった時間こえた声は…とても楽しそうな声だった。

【行ってくるといい、そこはハイスクールD×Dの世界。君は知らない。

いだろうけど、こっちでは知る人は知ってる小説だよ。」

胎動…今冥界に生まれるであろうその鼓動は、ドラゴン、天使、悪魔、堕天使、人間、妖怪、吸血鬼…その世界に生きる者たちが一瞬感じた…王の気質だった。

電斧の彗卿

「戦争が始まる。」

大広間：シトリ一家の中で会議や食事を食べる場所として使われる場所であり、今は会議中である。

おっと、いきなり話が進んでいて困惑している奴らもいるだろうか。まずは簡単に自己紹介からしようか。

俺の名前はスフルトウア・シトリ。

プロログでは名前も出なかった男だ。

うん？いきなり話が飛んだ理由？まあそうだな：だって特に話すことも無いからさ。

まあ強いて言うなら：俺はこの家に生まれて良かったと思ってるよ。

親父は俺に生きていく上で必要な知識と心の強さを与えてくれて、お袋は家族の暖かさがどれだけ心地いいのかを教えてくれて、妹のセラフォルーは少々臆病ながらも俺の後ろに必ずついてきて俺の手助けをしてくれる。泣き虫なのがまた愛嬌があり、数年前までは風呂も寝るときも一緒に程べったりだった。

「聞いているのか、スフルトウア？」

「聞いているよ、親父。」

おっと、訝しげな顔で俺を見てくる親父がいる。

まあだから俺は幸せさ：：：強いて言うなら最近お袋の調子が悪いところが気にはなってるが。

「うむ：：：今回の戦争では魔王レヴィアタン様の下に赴き、天使と墮天使の幹部殲滅に当たることになる。お前の弟分のサーゼクス・グレモリーはルシファー様の下らしいな？」

「ああ、ゼクスか。まああいつの力を考えれば、ルシファー様の下でヤハウエ相手に力を振るった方がいいだろうな。」

サーゼクス・グレモリーは俺の弟分になる。初めて会ったのは親父が72柱の会合に行った時だ。

滅びの魔力というバアル家の力を持つゼクスだが、力の使い方がお

粗末過ぎて助言した事がある。

それからは兄上と慕ってくれるようになった。

「グレモリー家の男がバアル家の力をな……今聞いてもとんでもない事だな。バアル家がグレモリー家を恨んでいるのは明白か。」

「けどお兄ちゃんは『《ひょうふのOMETTロード》電斧の慧卿』として冥界に名前は知られてるでしょ?」

慧斧の電卿……シトリー家は水を司る家系だ。セラフォルーは氷を得意とし、親父は水。お袋は元々名のある家系で、突出しているのは地を操る力。セラフォルーはお袋の血をあまり受け継げなかったのか水と氷を得意としてかなり鍛えていた。

俺は親父とお袋の血を色濃く受け継いでいるようで、地……大地から生成される物質と水を操れた。

そして操り始めたのは電と鉄。現存する鉱物の中では強度は低いかもしれないが、そこは技術と機転でカバーをし、鍛えに鍛えた体で戦う。

まあ詳しい事は戦いで見せる事もあるだろうからこの辺りでやめておこう。

「そうだな……まあスフルトウアが功績を残すのは分かってるさ。……私が気にしているのはセラフォルーだ。」

「ううう……」

セラフォルーが俯き俺の服の袖を掴んで来た。

セラフォルーはまだ悪魔で言う成人を済ませたばかりだ。それはゼクスも同じだが、ついこの間セラフォルーは最上級悪魔の試験を落としてしまった。

それで自信を無くしてしまったのか、今まで積極的にやってきた修行も休んでいる始末だ。

「セラフォルー……お前はとうしたの? いや、この聞き方はいかんな。中級悪魔以上は戦争へ参加する義務がある。もし戦争に出たく無いと思っっているなら……すまないがそれは受理されない。」

「……戦争になんか行きたく無い。でもっ……お兄ちゃんとお父さんは行くんだよ……ね?」

「当たり前だ。ルシファー様にベルゼブブ様、アスモデウス様にレヴィアタン様に忠誠を誓っている我等72柱。戦争に参加しないなどという世迷言を吐く事などあり得ない。」

「親父の言う通りだよセラフオール。確かに戦争は恐ろしい物だ。お前が産まれる少し前にも戦争はあった。その時に俺の知り合いは堕天使に消滅させられたよ。ぶっちゃければ俺も怖いさ。死の概念なんて理解したく無いが……後に残ったものは悲しみを抱くからな。けどな……それでも大事な人を守りたいという気持ちはある。だから戦争に行く。ただ蹂躪されるだけなんて嫌だからな。セラフオール……怖いなら兄さんが守ってやる。やられそうになったら直ぐに駆けつけてやる。だから行こう。……お前は強い子だからな。セラフオールがいれば俺も頑張れる。」

俺は大事な人を守るために戦う。そう決めているんだ。

「お兄ちゃん……」

「……覚悟はできたようだな。」

「兄上！」

「ゼクスか……お前はルシファー様の所に行くんじや無いのか？」

あの日、セラフオールが戦争へ行くと覚悟を決めた日から数日後……ついに戦争が始まった。

親父は先にレヴィアタン様の所へ行っているようで、俺はセラフオールと共にお袋の見舞いに行った後だ。

その途中でゼクスにあつたのだが、どうやら緊張しているようでゼクスを取り巻く魔力の流れが乱れているのを感じる。

「緊張してるのか？」

「……そうですね。なにせ初めて戦争に参加するもので……」

はははと苦笑いをするゼクスは、俺の隣で緊張気味なセラフオールを一瞥して俺に近寄ってきた。近いぞ、ゼクス。

「す、すいません。あの……セラフオールは大丈夫なんですか？」

緊張しているのかさつきからあつちをウロウロこつちをウロウロとジグザグに飛び、ハツと前を向いて俺たちが先に行っているのを見

て追いかけてきて、またしばらくするとあつちをウロウロこつちをウロウロとする…そんな事を繰り返しているセラフォールーを見て、この戦争を生き残れるか心配になっていいのかゼクスは眉を潜めていた。「……戦争になればセラフォールーも気持ちを切り替えると思うがな……。ゼクス、聞いていると思うが、今回の戦争はかなり危険だ。魔王様たちもそうだが、ヤハウエやアザゼル…あいつらの頭もイかれてきている。誰が好き好んで二天龍が目撃された地で戦争をしようと思おう？」

「やはりあの噂は本当ですか……。二天龍…赤き龍の帝王ドライグに白き龍の皇帝アルビオン。あの2体が……」

ドラゴン…俺が産まれるより前から存在している最強種の生物。六大龍王の1体であるティアマットは幼い頃から友人だが、中には気性の荒い者もいて、特に二天龍は仲が悪く…よく喧嘩をしては冥界の土地を一部地図から無くすらしい。

「まあ俺らみたいになちっぽけな存在には見向きもしないだろうけどな。」

「兄上の存在がちっぽけなら、僕なんか塵とかでしょうか？」

そんな事をしゃべりながら決戦地へ向かう俺たち。気持ち程よく解れてきたのか、ゼクスの魔力は別れる時には落ち着いていた。

そして戦争の始まりであろう、ルシファー様の巨大な魔力が空中を覆った。

そういえばのリブラートの奴はまた参加しないのか？ルシファー様の孫で、力も確かなのにな……。まああんな親父がいれば引きこもるか。この前会った時は人間の女と尻の良さを淡々と語られたがな。

「スフルトゥア様！」

戦争が始まり3時間が過ぎた頃…雑兵であろう天使や墮天使を俺とセラフォールー、そしてレヴィアタン様の血筋であるカテレアの3人で一網打尽にしていた頃、1人の中級悪魔が俺に近づいてきた。かなり切羽詰ってるようで、肩で息をしていた。

「どうした？顔が蒼白だが……」

「ま、魔王アスモデウス様とベルゼブブ様が戦死！魔王ルシファー様もヤハウエとの戦闘で重傷！魔王レヴィアタン様は現在ミカエルと戦闘中の為、代理としてシトリ一家のスフルトウア様が軍の指揮を執れとの事です！」

おいおい…上司が殆ど全滅じゃねえか。

「カテレア！現状報告！」

「ふえ!?は、はい！現在レヴィアタン軍の損害は4割を超え、アウルストー・シトリ殿、私…カテレア・レヴィアタン、スフルトウア・シトリ様、デイハウザー・ベリアル、ロイガン・ベルフェゴール、ビィディゼ・アバドン計6名の隊しか残っておりません！……スフルトウア様に呼び捨てにされたわ……はう」

ん？最後ボソボソ言っていたがなんだ？だがやはり現状は残酷だな。デイハウザーはまだしも、ロイガンにビィディゼはまだ上級悪魔になったばかりで戦争未経験者だ。このままではジリ貧か……

「まずいな……こうまで俺たちの上層部がやられてるとは……おい、今いる72柱を始めとした悪魔陣営の生き残りは何割だ？」

「……5割を切っています。」

衝撃の事実すぎる！くそつたれが……半壊してんじゃねえか！

「親父、デイハウザー！数名引き連れてルシファー軍と合流！ロイガンとビィディゼは隊員全員連れてベルゼブブ、アスモデウス軍に合流しろ！カテレアはレヴィアタン様の援護に迎え！レヴィアタン軍は解散だ！」

俺がそう言うなりそれぞれが渋い顔をしたが、親父とカテレアは俺の事をよく知っているからか快く俺の命令に従ってくれた。

去り際にセラフォルが頑張つてと頬にキスをしてくれた。負けるわけにはいかないな。

目の前には下級天使の光弾。それを人差し指で弾き後方にいるこの場限りの部下に激励をかける。

「ほら来いよ雑兵共が……お前ら！気を抜くな！ここを凌いで天使長を打ちに行くぞ!!」

「はっ!!」

「……………はあ。」

「な、なぜ溜息をつくのですか!」

あれから5日……部下を死なせまいと動いていたが、まるでゴミのように半数が消滅させられた部下を見て溜息をついてしまった。それと部下を消し去った目の前にいる、元々はブロンドの髪で美人なのだろうが、5日もまともな休息がとれてないのか髪はボサボサで顔に汚れが見える女。

なぜこんな女に俺の部下がやられなければいけないのか……こうしてみればこの女は上級天使。俺の部下は最上級悪魔を含めて10人。それが半壊だぜ……まさかの実力保持者に今までの戦いが前戯かよってほどの高揚感。

やっぱ戦争はこうでなくちゃならねえよなああ!!

「さあ殺ろうぜ。俺は今、興奮してんだよ!」

「ま、魔力の量が桁違いすぎますわね……あなたは魔王ですか?」

どうやら相手は魔王様達とは戦っていないらしい。これは好都合だな。

「いんや……俺なんか魔王様には遠く及ばないさ!」

ここで殺してもいいし、逃げられてもこの強さを天界側に知らせれば儲け物だ!

「くっ!?喰らいなさい!」

俺の周囲に浮かび上がる光の弾、そして女の右手に現れた雷弾と左手に現れた水弾。いきなりの技の種類に気が削がれる。短期決戦タイプらしい戦い方だ。

「絶氷魔の息吹」

ただ淡々と……この程度では俺に傷はつかないぞという意味を込めて大気を凍らせる。この程度では流石にやられないだろう。周囲の空気が完全に凍り、息を吸えば肺が凍る程度だ。既に光の弾は凍り砕け散った。大天使なら……

「ひっ……………」

睨みを利かせた瞬間びくりと震える女。持っている杖が凍り付き、服さえもまるで氷のようにパリパリと音を立て始めた。

「……………よわ。」

まさか障壁がここまで薄いのは驚いた。皮膚が凍ってないということはある程度上級の障壁か、もしくは元々身にしか障壁を纏っていない証拠だな。

アジユカやゼクスが五十程障壁を張っても身動きが取れなくなるぐらいの威力だったから、セラフォルの修行の為に改良したこの技がここまで効くとわな。

「ああ、お前もあれか……雑魚兵としか戦ってなかったのか。」

「ぎ、雑魚兵?」

既に半身が剥き出しになり、もう少しで胸が見えそうな所まで服が砕け散っている。

天使相手に欲情はしないが、結局女はこれで戦意が喪失する。少しはやり手かと思ったが実力は上級天使を超えている事はなさそうだ。

「中級の悪魔の魔力が余り感じられないし、上級から上の悪魔は程々に健在中。下級の墮天使や天使を殺してきた身としてはお前らもその口だろうか?」

この程度では俺の興奮は収まらない。やっぱり織天使、もしくは墮天使幹部並みの実力を持つ奴と戦いたいな……。

「それは……っ!」

「まあいいさ。……ここでくたばれ、天使。」

俺は雑魚には興味無いんだ。

両手に持つのは極大の氷の剣。技とかそういうものでは無い。ただ圧殺するだけの超巨大な氷に過ぎない。

俺はそれを目の前にいる天使に振り下ろそうとする……が、横槍を文字どおり入れてきた黒い汚い羽を持つ墮天使に向かって横に薙ぐ。

光の槍を好んで使うのは墮天使の専売特許だろう。まあ当たらなければどうってことは無いが。

「お前は……墮天使コカビエルか。」

「ほう……覚えていてくれるとは光栄だな、スフルトウア・シトリー。何

百年ぶりだ?」

前回の戦争で俺の友を殺した張本人。あの時の借りを返す時だな。「さてな…ざつと125年ぐらいかね。」

氷の大剣を消し腕を組みコカビエルを見る。流石に聖書に記される墮天使なだけあつて感じる光力には笑みが浮かんでしまう。

あの頃はまだ上級悪魔の域を出ていなかった俺が、今では好敵手に会えたかのようにワクワクとしている。

ああ……こいつを凍らせてみたい。

「私たちに腹の探り合いはいらないうらなう。あの頃から目をつけていたんだ…私を楽しませろ!」

突如光の槍を構えて襲いかかってくるコカビエルに、俺は一本の長剣で応戦する。氷属性の剣っていうだけのものだが、勿論俺の魔力量により強度は桁違いになっている。

「はははははっ!!そんなものでええ!!」

「喋ってる舌噛むぜ、コカビエルさんよおお!!」

俺の剣とコカビエル槍が交差しお互いの得物が碎ける。直ぐ様新しい剣を作り、コカビエルの後ろに氷の槍を出現させる。コカビエルはニヤリと笑ったまま俺の顔めがけ光の槍を投擲するが、それをわざわざ紙一重で避けてやる。

「背中に気をつけろよ!!」

「ぬっ!?!」

俺の作った槍が超高速でコカビエルに迫った瞬間、槍を3本に分裂させ頭と胴体、足に向かって行く……それを見たコカビエルは光の壁を背に張り防御する。

追撃は許さないとばかりにコカビエルが光の槍を2本携え襲いかかってくるが、氷の柱を作りコカビエルの軌道を僅かに動かす。その隙に俺は右手に鉄のガントレットを作り、左手には氷の斧を持つ。

コカビエルの恐ろしさはその戦闘狂な所だ。戦闘狂と言われているがコカビエルは戦争上手。戦いの中で培われる実力は普通の修行に比べ10倍は経験値が違うので、ただ向かい打つだけでは押し負ける。

俺は親友達に力を貸してもらい、自分の戦い方を復習しどんな戦い方なら弱者が強者に勝てるか考えた。

「やっぱ、力押しじゃね？」と言ったりリブラート・リヴァン・ルシファーを思い出し、やはりブレスぐらいは吐けるようになれと天魔の業龍ティアマットには火を食わされ、方程式を学んでみたらどうだい？と言った頭脳バカ、アジユカ・アスタロトを思い出し、お前なら墮天使幹部等一撃で仕留められるさと言った親父、お兄ちゃんは私の自慢のお兄ちゃんだよと言ってくれたセラフォルを思い浮かべ…最後に、お前の強さなら戦争ぐらい簡単に終わらせてくれるだろ？と言っていた友…アルブレス・ルキフグスの事を考える。

「長々と戦う気は無いんでね…終わらせてやろう。電斧バルザック!!!」

「……これが電斧の慧卿か。いいだろう……俺も全力で相手をしてやろう！」

俺は斧とガントレットを交差させ打ち響かせる。両手に感じていた重さは直ぐに消え代わりに体が重くなる。

まるで何かを支えるような重さ…俺の背後には約1メートルの薄い水色の斧が漂っていた。

コカビエルもこの斧から感じる魔力量に眉を顰めた後、ニヤリと口角を上げた。

電斧とはシリーズだ。俺の技は特別凄いものでは無い。ただ相性が良かっただけの副産物だ。

それが今では冥界では知らないと言われない程の名を得た。

「コカビエル、気をつけろよ…こいつは早くて重いぜ？」

「誰に物を言ってる!？」

コカビエルが背後に出した幾千もの光の槍…それが瞬く間に破壊されていく。

まるで彗星のような輝きの物が通過していくだけでだ。

「うっ…おおおおおお!？」

狩るものが無くなった斧は次にコカビエルに向かう…まあ向かわせているのだが、いかんせん重い。

考えられないほど重い。

いやまじで。

「ぐおおお!!」

コカビエルは威力を殺そうと羽を広げ光力を吹き出す。それでもその斧に押されコカビエルは顔を歪ませる。

質量保存の法則：等とアジユカは冷や汗を流していたのを思い出す。

知らん。あれだ、俺の魔力の重さが斧に反映されてるだけだ。多分。

え？お前の技だろって？いやいや：なんか混ぜたらこうなった。が正解だ。ぶっちゃけあれはコカビエルに近づきたくない為のもので技ではない。

「なんという重量だっ!?!はははっ！腕に罅が入った！」

……まあ両腕で庇ってるからな。しかしあいつは楽しそうだな……あれか、とりあえず戦争できてハッピーな感じだろう。

「バルザック・エンド！」

まあここで遊んでいても仕方ない。とりあえずコカビエルはこれで終わらせようと、俺は指を鳴らした。

「がっ……………!?!」

超巨大な爆音と急激な温度変化、四方八方に飛ぶ超硬度な破片はコカビエルの腕を破壊しても尚勢いは止まらず貫通してきた。

地面に落ちた破片は巨大な音を立ててクレーターを作り、味方の方に飛んでいきそうなものは消し去る。

「どうだった、俺の電斧は？」

「……………為になった。」

そう呟いて落下していくコカビエル。死んだかは分からないが、今回の戦争ではもう役に立たないであろうと理解し、俺は遥か後方で怯えた表情をしている天使の女を見る。既に服としての機能は失っているそれを抱きかかえ、戦場でマツパの女天使が出来上がっていた。

電斧の慧卿：それは密度や質量等を無視した規格外の力を操り、超音速で飛ぶ塊を自由自在に操り敵を殲滅する者。

余りの魔力濃度に冥界の空は割れ、次元の狭間が姿を見せる程。
名付け親はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー…魔王の血族が唯一
頼りにする男、スフルトウア・シトリーの事だ。

コカビエル討伐完了…約5分の出来事だ。

二天龍との遭遇

それが現れたのは一瞬だった。

空を覆う程の赤と白…唸り声のような風が吹き慌てて飛ばされそうになるのを堪える。

「きやあああああ！」

「っ?!んのやろう……」

甲高い叫び声と共に俺の背中にぶつかってきた肌色の物体。あの天使だろう。

自分の身を隠すことにしか意識していなかったのか、あまりにも無様に俺の後頭部に肘鉄を食らわせてきやがった。

「ち、違うんです！これはっ?!」

「うおっ?!」

バサツ!という音が聞こえてきた瞬間、俺と天使は地面へと落とされた。攻撃…そんなチャチなものではないぐらいの力強さだった。

地面へと落下していく際に、まだ背中に縋り付く天使を鬱陶しく思い離そうとするが既に狂乱状態に陥っているのかあわあわと言いなから俺の頭を抱え込みやがった。

「お、おい！離せ！てめえ俺を道連れにするつもりっぷっ?!」

「ああああああああ！」

話も聞いてくれないか…と言うか、なぜか俺の顔面に柔らかい物と少し硬いものが覆い隠す。息ができず俺はそれを剥がすように掴むと天使は狼狽え涙を流し、遂には俺の顔面にストレートパンチを放ってきた…光力を纏わせ。

「てめえ！何殺しにかかってきやがる!!」

「むむむむむむ！胸を触ったんですから当たり前ですっ!!!」

知るかよっ!と言いたかったがその前に塞がなければ怪我をする。こんなところで雑魚天使に殺されるのはナンセンスだ。てか胸を触られたぐらいで殺そうとしてくる神経が理解できない!

「ずあっ?!」

「きやあ!」

何を叫んでいるんだこいつは。いや、それよりもだ……上空を見上げれば炎が飛び交い赤と白が高速で激突している。

「赤龍帝に白龍皇……やはり現れたか。」

「うそ……お姉様が墮天使に墮ちそうに成る程のお方が私の前に……ダメよガブリエル。落ち着いて。ここで気を緩めたら墮天使に……」

このガブリエルという天使……さつきから翼が白黒点滅してるんだが体調不良か？そういういえばジブリアルも俺と会うなり白黒させてたな。なんでもありません！と回し蹴りを食らわされた記憶がある。

「……ん？」

『聞こえるお兄ちゃん！聞こえたら返事をして！』

『スフルトウア殿、聞こえますか？』

俺の右の耳元に家族用の通信魔法陣が展開され、左の耳元には軍務用の魔方阵が展開された。左からはセラフォル。右からはアジユカの声だ。

「ああ、無事だ。お前たちは？」

『お前たち？ああ、セラフォルですか。それよりもスフルトウア殿、今すぐ悪魔陣地へお戻りを。赤龍帝と白龍皇が現れた事で天使や墮天使だけではなく、悪魔の大半が先ほどの羽ばたきで恐慌状態になり戦意を喪失しています。一度態勢を整えようかと。』

『お兄ちゃん？あれ、アジユカちゃん？——』

どうやらアジユカが他の悪魔にも伝達をしているようで、途中からセラフォルの声は聞こえなくなった。

まあとりあえず戻るか。そう決めた俺が飛び立とうとした瞬間……俺の翼を握られた。

「……腰が抜けたわけではありませんが、私を上にも上げる事を許しっ!?ちよ、ちよ……スフルトウア様!？」

「おい、目がチカチカするからその点滅をやめるか翼をしまえ。」

ああ……ジブリアルの妹なら無下にはできん。まあ俺はだがな。このままあげてほったらかしにしていたらジブリアルに何をされるかわからん。

「おい、ガブリエル。お前は どうする？連絡は来てないのか？」

「は、はい……とりあえずお姉様に連絡して天使の陣地へ戻ります。」

穴から這い出てガブリエルに俺は上着を脱ぎかけてやる。ジブ
リールが怖いわけじゃないぞ？あれだ……とりあえず一時停戦だろう
しあいつの妹は無下にはできないからだ。

「あ……………」

「だからその点滅をやめろ。」

俺が上半身裸になった瞬間今までにないぐらいの点滅の速さが目
に付く。堕天使に堕ちるかどうかの瀬戸際らしい。一度ジブリール
を押し倒した時と似ているな。

『兄上、ルシファア様が目を覚ましました。すぐに戻ってください。』

「ん？わかった。……じゃあなガブリエル。」

「あ、スフルトウア様……」

耳元でゼクスの声が聞こえ俺は気を引き締める。とりあえずは向
かおう。話はそれからだ。

俺はガブリエルに別れの言葉を告げて直ぐに足に魔力を溜めて落
下地点の森を走り抜ける。

まだ上空では赤と白が激突していた。

「ん？クルゼレイ？」

途中森を抜け山脈地帯を走っていると空にクルゼレイ・アスモデウ
スがよろよろと飛んでいるのが見えた。俺はそのお粗末な飛び方に
眉を顰め飛び上がり翼を広げる……クルゼレイより一對多い翼を携え
て。

「ス、スフルトウア!?なぜ貴様が!？」

ああ、そういえばこいつは俺が嫌いだっけな。確かカテレアにご執
心のアスモデウス家の血筋。そう認識している。

「怪我をしているのか？」

だがこいつが俺を嫌いであろうとそれはどうでもいい。逆にカテ
レアを連れて駆け落ちをしてくれそうな面白い奴だ。まあカテレア
が俺にご執心だからな……嫌ではないが、あいつといるとセラフオ
ルーが俺と口を聞かなくなる。

「お前は……服を脱いでいるのに怪我が無いな。」

「まあ服は捨てたよ。汚れたからな。怪我も俺の障壁の厚さなら問題はなかった。コカビエルと戦った時は肝を冷やしたが。」

「……………化け物め。」

そう言つてクルゼレイはがくりと気を失つた。よく見ると体の至る所に傷がある。アスモデウス様が死んでからはこいつが指揮を取つていたんだらう。こいつは悪魔の事を考えて行動を起こす奴だからな。

「めんどくさい拾い物をしちまつたな。」

俺は落下しそうになるクルゼレイの襟を掴み悪魔陣地へ高速で戻つた。

途中起きたクルゼレイが俺の速度に目を回し気絶したのは酒のつまみになりそうな出来事だった。

「お兄ちゃん……………つて、クルゼレイ？うわ……………ちよ、なんで顔を青く……………きやあ！クルゼレイが吐いた！」

悪魔陣地…冥界でも名前の無い小さな町だが、仮拠点としては十分な場所に着いたところでセラフオールから迎えられるが、クルゼレイは俺の肩を掴み顔を青くした後口を押さえた。俺は被害を受けないために加減をして回し蹴りを食らわすと、セラフオールの後ろまで飛んでいき盛大に吐いた。

あ、カテレアが情けないモノを見るような目でクルゼレイを見ている。

「セラフオール、ルシファー様は？」

「今72柱の当主と集まって話してる。このままだと赤と白に滅ぼされるかもつて青い顔してた。」

馬鹿だな…初めから分かつてただろうに。72柱の当主…だが見渡す限りあの赤い髪は見当たらない。

「ゼクスは？」

「…今ルシファー様達と一緒に会議に出席してる。グレモリー卿も。」
どうやら当主だけではなくある程度の実力者は集まつてるらしいな。

「俺も行く。セラフオールは怪我人の治療に回れ。俺たちの領民を最優先だ。」

俺はそれだけ伝え、ルシファー様のいる家へと向かった。

「ですが！赤龍帝と白龍皇がいる限りは戦争も続けられません！」

そう叫び声を上げたのはゼクラム・バアル。バアル家の現当主で大王家ではかなりの発言権を持っている実力者だ。

「分かっている！だがこのままでは終われん！逆に今こそ反撃の時だ！72柱も既に半壊！中級悪魔から下はほぼ全滅で上級、最上級悪魔もかなりの数を減らした！今こそ墮天使を冥界から追い出すチャンスなのだ！」

頭に血が上っているんだろう。輝かしいグレーの髪を持つルシファー様は顔を醜悪に変えテールを叩く。

テールは砕け散り、衝撃が下にも伝わったのか地面が揺れた。

「……親父、大丈夫か？」

俺は少し離れた所にいる親父を見つけ駆け寄る。至る所に傷があるがどうやら大丈夫のようだ。

「おお、スフルトウアか。見ていたぞ……よくぞコカビエルを倒した。まあ次元の狭間が現れた時は肝を冷やしたがな。」

そう言いながら親父は疲れが出たのか地面に座り込んだ。歳なんだからもうちよつと体を労ってほしいものだ。

「しかしルシファー。私たちは既に戦える者も多くありません。無様に命を散らせるよりも、ここで停戦してこれ以上悪魔に被害をださ」「黙れレヴィアタン!!貴様、自分が魔王だということを忘れていないのか!?!」

「そんなことあるわけが!」

ああ、レヴィアタン様は生きていたな。白い髪は所々黒くなっているが、顔を見る限りミカエルとは決着はつかなかったのだろう。ん？「スフルトウア!ああ、スフルトウア……無事だったのですね!」

レヴィアタン様と目があつた瞬間抱擁をされた。俺の頬に絶壁が押し付けられたが、俺が膝立ちなのにレヴィアタン様の体が俺の顔に

あるということ、この方は身長が低い…それはもうセラフオールよりも。

「レヴィアタン様、あの…」
「はっ!?!」

俺の隣で親父が困惑の表情をしていた。まあ魔王様に抱擁をされる息子を見たらそうなるか。

レヴィアタン様は顔をみるみる赤くし俺から離れた。

レヴィアタン様にそういう感情が俺にあるのは知っているが、いかんせん魔王と72柱の長男では格差がありすぎるし、俺は忠誠を誓うものとしてそういう感情は抱いてはいない。

話が逸れたが、レヴィアタン様はこほんと咳払いをした後先ほどまでいた位置へ戻っていった。

「スフルトウア…お前。」

「親父、そんな目で見るな。」

俺はああいうのが好みなのか?という視線に耐え切れずため息を吐いた。体を自由に変化させれるのにあの体型…趣味なんだろう。いろんな意味で。

「……ともかく。私達は墮天使に」

「大変ですルシファー様!!神ヤハウエとそのお付き、墮天使総督アザゼルと幹部達がこちらに向かってきています!」

それを聞いた俺、レヴィアタン様、サーゼクス、グレモリー卿、ゼクラム・バアル、その他大勢は一斉にルシファー様から離れた。

その瞬間爆発…家は吹き飛び俺たちは家の外へ弾き飛ばされる前に受け身を取る準備ができていたが、そうでなかったものは無様に転げ気を失っていた。

「ひっ!?!」

無事なのは報告に来た男のみ。既に穴という穴から何か垂れているが、今のはお前が悪い。この場でそれを言えばルシファー様がどうするかなど分かるだろうに。

「ヤハウエエエエエ!!アザゼルウウウウウウ!」

ルシファー様は空へ魔力弾を放つ。直径約5キロもの魔力弾…

これを撃つてなお更のでかい魔力弾を放つ。疲弊の色が見えないな。
「ありやあ死ぬな。」

「あ、兄上！そんな悠長な!？」

「ああ……スフルトウア、最後に私に口付けを」
んなこと言ってる場合じゃないぜ、レヴィアタン様。

ほらきた。

「そんなに怒らなくてもいいじゃねえか、ルシファーよ。うわああ
……やべ、光力が消えかかってやがる。」

「全くです。無駄な力を使いました……80%程。」

それは壊滅的だな。

「スフルトウア（様）！」

「ごふううう!？」

おおおお、なんでジブリールとガブリエルが並んでやがる！

てかジブリールの奴、俺に駆け寄ってから鳩尾に抉るようなパンチ
を……

「てめ……光力込めやがったな！」

「聞きましたよ、スフルトウア。私の妹を裸に剥き蹂躪したと。」

「してねえよ！ガブリエル！てめえなんて説明しやがった！」

「本当の事です！わた、私のおっぱいを揉んだじゃないですか!!」

こいつら……苦手だ！てかガブリエル……お前そんな大声で

「あ、兄上？えと……ひっ！」

「スフルトウア・シトリー？」

……
サーゼクス！助ける！おおう、レヴィアタン様の後ろに巨大な獣が

「ベヒーモス、晩御飯よ？」

「たく、気は済んだか？」

「いたっ!?は、はいいい……」

俺はボロボロになった体でガブリエルの頭を小突く。ベヒーモス
とか出してくるレヴィアタン様もレヴィアタン様だがな。おかげで

ベヒーモスの氷像ができてしまった。

「あら、ベヒーモス？……まあ今回は許して差し上げましょう。」

レヴィアタン様は氷像ベヒーモスを一瞥し腰に手を当ててにこりと笑った。

まあ戦力ガタ落ちだけだな。

「……それで、あつちは？」

俺は机を挟み睨んでいるルシファー様、苦笑いを浮かべているアザゼル、優雅に足を組み頭の天使の輪っかを指でなぞっているヤハウエを見て……碌な結果にならねえなと思った。

「なら、お前がああ赤と白を封印すると？」

「ええ、その通りです。今まで魔獣やドラゴンを神器として封印してきたのは私です。ならばあの日二天龍も……と。」

「なるほどな……まあ一番いい結果にはなりそうだな。」

てな感じでギスギスした感じはあるものの話は纏まりそうだった。

つまりは3大勢力合同である二天龍を封印しようという事だ。

ヤハウエが要のこの作戦……まずはヤハウエ以外が二天龍の足止め。その間にヤハウエが二天龍を神器と呼ばれる物に封印する為の準備。準備が完了したら二天龍を撃退し細切れにして封印……という力がモノを言う作戦だった。

「……おい、ガブリエル。」

「言いたい事は分かります。ですけど、多分1番の作戦です。」

そういうガブリエルの顔は怯えや恐怖が滲み出ていた。遠くを見ればセラフォルと親父が何か話しており、サーゼクスはアジュカやクルゼレイなどと、力を持っているものが集まっていた。

レヴィアタン様はルシファー様の後ろに立ち俺をチラチラ見ている。あ、ジブリールも加わった。おい、シエムハザとミカエルを見てみる……あいつらはちゃんと護衛の仕事してるんだぞ。

「……てかお前、いつまで俺の服着てんだよ？」

「あ……あの、スフルトウア様。」

こいつは何故か俺の服を着ている。確かに裸では嫌だろうと服を貸したのは俺なんだが、服なんか物資の中にもあるだろうに俺の服を

着ている。

「お前、生まれはいつだ？」

「ふえ？えつと……今から150年ぐらい前です。」

「餓鬼じゃねえか？サーゼクス達と同じぐらいって事は俺とは200年も離れてるのか。」

「ん？なんで俺はそんな事を考えた？」

「あの……スフルトウア様は戦争経験者とか？」

「まあな。て言っても前回の戦争は特に大した功績はあげてない。精々敵の陣地を20程壊したぐらいだ。」

「流石です……あー！」

「お前……まじ墮天するんじゃないか？」

今の言葉、墮天使、もしくは天使に聞かれてたら打ち首だぜ？まあ……見た目天然だしな。内のお袋に似ている。あの人は平気な顔で料理しているが味は壊滅的だ。俺がもう料理はいいと言った時は泣かれたな……まあ死ぬよりマシか。親父、手料理食った事ないって言うてたしな。

「………墮天使なら、こんな気持ちも正直に話せるのでしようか？」

そう言ったガブリエルの顔は、カテレアやクルゼレイ、サーゼクスやグレイフィアに似ている。そういえばグレイフィアを見ていないな。まああいつなら無事だろう……何せ俺に罵声を浴びせるぐらいの女だしな。

「………むく。」

そんな事を考えているとガブリエルの顔がおかしな事になっていた。頬を膨らませ俺を見上げてくる。

「んだよその顔？笑えるぞ？」

「ふにやあああー！」

俺がくくつと笑いガブリエルの頬を押せば、顔を真っ赤にして俺の横っ腹をバシバシ叩いてきた。

「ちよ、くすぐ………いて……おい、今光力を……」

「うおおおおおおお！」

「きゃあああ！」

突如襲いかかる風圧に俺はガブリエルを庇うように抱きしめてしまった。上を見上げればどでかい怪鳥…ジズか。

「レヴィアタン様!」

ルシファア様の後ろにいたのであろうレヴィアタン様は、顔に笑みを貼り付けながら指を動かしていた。

あの方は俺を殺す気か!?

「あわあわあわあわあわ!」

俺の胸元で顔を真っ赤にして目を回しているガブリエルを見て…俺はふっと笑みを浮かべた。